城下小

主体的に関わり、学びを深めていく児童の育成

～児童の課題解決力を高める指導法の工夫を通して～（3年次計画の3年次）

校長　　木村　朋子

１　研究主題について

・教育目標具現化の立場から

本校では、教育目標の「心豊かに学びたくましく生きる子どもの育成」及び努力目標「進んで学ぶ子」を受け、「夢や志の実現に向け、よりよく育とうとする子」を目指す児童像として教育活動を行っていく。主題を「主体的に関わり、学びを深めていく児童の育成」とし、児童の課題解決力を高め自らの夢や志の実現に向かって行動していくための基礎を培うとともに、課題解決の基盤となる情報活用能力を養うための授業づくりについて研究を深め、教育目標の具現化を進めていく。また、話し方や聞き方の定着を図ることや特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりを共通の取組としながら、児童が本時のねらいに確実に到達できるように努めていきたい。

・児童の実態から

本校児童は、これまでの取り組みの成果もあり、インターネットで情報収集したり、jamboard や Google スライドなどのアプリを活用したり、文字入力をしたりと課題を解決する上で学習の基盤となる情報活用能力の基礎が身に付いてきている。児童が考えを共有しさらに共に考える場面では、自分以外の様々な意見を知ることで、考えを深め課題解決に生かす様子が多く見られた。今年度は、互いに得た情報を共有し学び合う機会を工夫して設けることで、課題解決力を高め、学びを深めていく児童の育成を目指していく。

・これまでの実践から

これまで本校では、児童の課題解決力を高めることを目指し、情報活用能力を養うための指導法を工夫してきた。１年次から、１人１台端末を活用する場面を授業の中で位置づけることで、児童は端末の使い方に慣れ、基本的な操作ができるようになってきた。２年次は、さらに互いに得た情報を１人１台端末で共有したり、板書や実物投影機で共有したりするなど、様々な方法で児童の意欲を高め、学びの共有の仕方を探ってきた。今年度は、互いに得た情報や考えを共有する場をさらに工夫し、児童が多様な見方・考え方を知ったり、考えを深めたりすることで、課題解決力を高め、学びを深めていく指導を積み重ねていきたい。

２　研究のねらい

主体的に関わり、学びを深めていく児童を育成するために、学習に必要な情報を取り出し課題解決のための手立てとしたり、意見を集約し他者とともに問題の発見や解決に挑んだりできるような指導の在り方について、課題解決力を高めることにつながり、主体的に関わり、学びを深めていくことができると考える。

３　研究仮説

互いに得た情報や考えを共有する場を工夫し、多様な見方を知ったり考えを深めたりさせることで、課題解決力を高め、主体的に関わり学びを深めていくことができる。

４　研究内容

（1）　情報活用能力を養うための指導の工夫

ア　ICT 機器の効果的な指導の工夫をする。

（2）　特別支援教育の視点を取り入れた指導の工夫

ア　児童が考えたり理解したりする助けとなる視覚支援を工夫する

５　研究の経過

⑴ 研究仮説に基づく授業研究

月	日	題材名・授業者	授業の概要
9	27	第１回授業研究（２学年） 音楽「おまつりの音楽をつくろう」 授業者　　松橋　茉里奈　　講師 助言者 八戸市立江陽小学校　教頭 石井　一二三 氏	前時までに作った太鼓のリズムカードを使って、グループごとに自分たちのお祭りの音楽を作るという課題に取り組ませた。グループ１台のタブレットにし、ジャムボード上のリズムカードを操作させたことで、意見を共有しながら活動することにつながったほか、カードの入れ替えが簡単な分、音楽を作る時間が十分に確保され、意欲的に学習することができた。
11	20	第２回授業研究（６学年） 社会「大久保利通と 明治新政府の改革」 授業者　　関下　健司　　教諭 助言者　八戸市教育委員会 教育指導課　主任指導主事 青木　拓哉 氏	富国強兵のための諸政策について考えさせることで、明治新政府が目指した強い国づくりを捉えさせた。おさえたい重要政策を４つに絞って示し、自分が大事だと思う政策のランキングを作らせることで、児童自ら教科書や資料を読んで考えるなど、主体的に学習に取り組むことにつながった。クラス全員の考えをモニターに映しながら１人１人ジャムボードでランキングさせたことで、自分と他の考えを比べながら学習することにつながった。

⑵ 一般研修

月	日	研　修　の　内　容
6	２１	ミニ研修講座　　講師：教育指導課　主任指導主事　中村　美穂　氏
6	２６	特別支援教育研修　　講師：青森県総合教育センター指導主事　森山　貴史　氏
7	9	AED 講習会　　講師：八戸消防本部救急隊員
9	6	小・中 JS 特別支援教育（ｽｸﾘｰﾆﾝｸﾞ研修会）講師：八戸学院短期大学教授　野口　和也　氏

６　研究の成果

⑴　「児童が考えを共有し、共に考える場」を研究し、日常的に授業で取り組んだことにより、各教科・領域において共有の仕方（1 人 1 台端末で、モニターに映して、具体物で、板書で、全体で、グループで等）を工夫した授業展開をすることができた。その結果、児童が多様な見方・考え方を知ったり、考えを深めたりすることにつながった。

⑵　ICT 機器を活用し、児童の手元で対象物を見せたり、同じものをモニターなどで見せながら共有させたりすることにより、どこを見るのか見たいのかが焦点化され、主体的に活動することができた。また、１人１台端末の効果的な活用により、児童の意見を引き出しやすくなり、意欲的な話し合いをすることにつながった。

７　研究の課題

⑴　共に考えるためには、自分の考えをもたせなければならない。児童に自分の考えをもたせるための手立てをさらに研究していく必要がある。

⑵　視覚支援は有効であったが、それだけでは難しい児童もいるので、視覚支援に絞らずに児童の実態に合わせた支援をしていくようにする。

（記入者　　髙橋　康子）